に居て僅に独立の体面を保たん者は独り我か日本のみと時に場中猛然として吼ゆる者あり曰く嗚呼殆い哉岌乎たりと其の声慘怛、

童顔疎髯諄々として倦まさる者我か穂積博士に非す耶、博士吾人は智識に依て動作するよりは進行に依て動作する方寧ろ其の多きを占む例へは水を飲めはとて然り云々と曰ひ終てコップを傾くること三両杯満堂大に笑ふ而して博士平然知らさる者の如し

一木先生得意の選挙法論、例に依て論旨精確なり（犬子生稿）

122　東京法学院学術講談会余話

〔『法学新報』第一〇八号　明治三十三年三月二十日〕

○講談会余話

午下一点、弁士席未た片影を認めす、忽ち観る一個粗袍弊履の快男児、其の名は則ち芳彦、姓は山田、其の演題を問へは曰く永世中立国としての朝鮮と、説く所必らすしも取る可らすとせす吾れ之れを聞く寸も長き所あり尺も短き所ありと山田生の謂ひ耶、生其れ勉めよや、

土方博士、通人也、愛嬌者也、――外の者の講演か終へて時間に余りあるときは必らす菊池君かエー説法をやるのて――衆皆な洪然、蓋し説法の二字菊池院長の講義、演説、弁論、雑談を形はし得て妙なれは也

吉村銀次郎、所謂小題大做之法を用ゐ、法律家の任務より日本帝国の地位に論及し一転して英吉利に於ける帝国統一主義を評し再転して東洋見下の形勢に到る眼烱々、舌爛々、感慨淋漓、儒夫をして起たしむ、揣らさりき此の人亦是我か院友ならんとは、

銀君東洋の形勢を述ふるや、印度云々ベルヂスタン云々而して波斯云々而して朝鮮云々而して支那云々輿国皆な彼か如し此間